



親鸞の生涯 35

晩年の親鸞
善鸞事件

「親鸞におきてはただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべしと、善き人の仰せをこうむりて信するほかに別の子細なきなり」(『歎異抄』二章)
如來の本願のみが眞実であつて、他のいかなる論説・教説も、すべて虚偽妄説であるという『唯信之道』を親鸞は生涯貫きました。それなるがゆえに、親鸞は、特に晩年、塗炭の苦悩に遇わねばなりません。

彼が、関東の伝道を終えて京都に帰つてきたのはすでに還暦を過ぎたころであります。また、大火・飢饉・疫病など毎年のように襲つてきました。

しかし、帰つてきたふるさと京都には、以前にもまして念佛弾圧の嵐が吹きすぎんでいて、法然門下の先輩同輩の多くは都を追われ没してしまった人も多くありました。また、大火・飢饉・疫病など毎年のように襲つてきました。

聖人帰京後の関東の念佛集団の間には、「賢善精進」などいろいろ教義上の対立やら、また「弟子の取り合い」「勢力の繩張り争い」など対立抗争がはじまり、互いの中傷非難を京都の親鸞へ訴えて来るようになりました。最も信頼できる指導者の要請もあり、当然親鸞は長く身近に置いて育ててきた善鸞を名代として関東に送り込みました。

しかし、それら対立抗争の渦のなかに投げ込まれた善鸞は苦しみました。のみならずともと関東はいわゆる淫祠邪教が根強い風土です。仏教でも真言密教系の山伏信仰も盛んでした。父親親鸞であるならば、そうした雰囲気を「面々のお

その親鸞が歳八十四歳のころ、降つて沸いたように噴出してきたこの『善鸞の義絶(勘当)事件』は、まさに親鸞の全人生を詰問するものでありました。

んはからい」と一応認めたような教化で善鸞に、各方面各分野から、誘いや反発や、揶揄や中傷が集中したに違いありません。それに対抗して善鸞も、ときには妥協したりおもねつたり、また時には邪義に加担したり、父親鸞を傘にきてわざと尊大な姿勢やまた、卑屈な姿勢を示したりしたこともあります。に違いません。

親鸞の第一子。(親鸞三十歳前後の出生)と推定されています。

「茲心伝房善口鸞鳥」
聖人帰京後の関東の念佛集団の間には、「賢善精進」などいろいろ教義上の対立やら、また「弟子の取り合い」「勢力の繩張り争い」など対立抗争がはじまり、互いの中傷非難を京都の親鸞へ訴えて来るようになりました。最も信頼できる指導者の要請もあり、当然親鸞は長く身近に置いて育ててきた善鸞を名代として関東に送り込みました。

しかし、それら対立抗争の渦のなかに投げ込まれた善鸞は苦しみました。のみならずともと関東はいわゆる淫祠邪教が根強い風土です。仏教でも真言密教系の山伏信仰も盛んでした。父親親鸞であるならば、そうした雰囲気を「面々のお

なみだを、ことあるごとに吐き出しました。善鸞は言わば「ミイラ」といがミイラになつたのです。加えて、多くあつた念佛集団のなかには、この善鸞や他派を非難中傷するなかで、みずから正當性を誇示しようとすると傾向ものなかに出てまいりました。

このあたりの入り組んだ模様を、当時の資料(親鸞のご消息など)からもう少し詳しく伺い、この事件の中を親鸞はどういうに生きたかを見てみたいと思います。

永六輔さんが愛知県犬山市で見かけた掲示板の言葉だそうです。こどもと老人に暖かいまなざしをあてて生きている人の心。「敬老の日」。だれもがこうであつてくれればと思いました。

ことわざ

子供叱るな

老人笑うな
行く道じや

この数字がくいちかってはダメですよ。子供は育ちませんと言うこと。示板の言葉だそうです。こどもと老人に暖かいまなざしをあてて生きている人の心。

二一つ叱つて
五つ寝め
七つ教えて
子は育つ

この数字がくいちかってはダメですよ。子供は育ちませんと言うこと。

濡れ手で粟

素手で、あわを掴んだ経験ありますか。サラサラ指の間からこぼれてしましました。手を濡らしたら予想以上にうまく掬いとれました。

苦勞もせずに利益をうること

逆に
親鸞 汝を 玉にす

困難をいくつも乗り切つてこそ玉のように輝く人物になれるのだ

